東南アジア粉体工業視察団報告

後藤 保男*
Yasuo Goto

タイ味の素社にて(バンコック)

50年11月17日 羽田を出発。コーディネーターの井伊谷教授以下13名と塗装関係と金属表面関係の視察団10名と一行23名は、タイ国バンコックに2泊、シンガポールに3泊。と、わずか6日間で相当ハード・スケジュールでした。バンコックとシンガポール周辺の一部の工場を視察して帰ったのみで、主題の「東南アジア視察」とはいささかオーバーな感があり、まず、この点ご了承を願って以下順次ご報告申し上げます。

バンコックの粉体工業

国王、仏教、民族主義の三位一体の古い歴史の新興国という私のタイ国に対するイメージは、バンコックに足を踏み入れてみると、物売りの子供、失業者、そして兵隊の姿が実に多く、裏切られたような思いをしました。しかしタイのドミノ化などといわれていることを考え合せてみると、致し方ないことかと思ひ直してもみました。さらに18日、19日と、2日間バンコックとその周辺の各工場を拝見し、また直接現地の人々の御意見を拝聴するに及んで、ククリット政権の3大政策目標、(1)貧困克服。(2)5年以内に完全雇用。(3)インフレ抑圧。すなわち、新経済の発展のために新興の意気に燃え、営々とし

て努力しつつある現地の若い熱心な技術者を視て、一入感銘を深くしました。

第一に訪問したのは「タイ味の素KK」で日本の味の素社との合併会社で、1961年の創業当初、生産量は月産50t程度でしたが、現在では1200tを生産し、今では『アジノモト』も現地語となったくらいで需要も増し、国外への輸出も増大しています。と、河岡取締役工場長は胸を張って説明してくださいました。過去10年間、苦勞の連続で今日に至り、従業員も670名となり、内女子110名で最近では福利厚生の方にも力を入れています。このサッカーのグラウンドも若い人のために最近作ったものです。と余裕のあるところを見せて下さいました。

工場敷地が広く、タイ国の大動脈、メナムの河岸にあって、原料はこの岸より陸揚げされる水利の便に恵まれています。また、それだけに廃水汚染の問題で、加藤課長は「相当神経を使いますヨ！」とのこと。

可性ソーダも隔膜法だそうです。何といっても原料のタピオカ(芋)と塩が国内で生産されるので、ゴムライニングから包装用エンビまで一貫生産している強みが進出企業の成功をみた要因の一つのことでした。事務所の前で、工場をバックに一同記念写真をとって、次の見学予定地、タイ・セントラル・ケミカル社へ。

同社に着いたのは午後4時でした。この会社は、日本のセントラル硝子と日商岩井とタイのメトロ社(タイ国の

昭和51年3月11日受理

* (株)増野製作所 (〒116 東京都荒川区荒川2-1-5)
TEL 03-891-3111

貿易商社)との合併会社で、今年(1975年)創業したばかりです。この会社では、窒素肥料、リン酸肥料、カリなどを日本、またはアメリカなどから輸入し、これらを水田用、糖きび用、バナナ、ヤシ、ゴム園用とその用途に分けてブレンドして粒状の化成肥料として出荷しています。その銘柄も16種にものぼり、現在、年10万トンプラントであるが、20万トンプラントを増設中で、76年末には合計30万トンの生産能力となり、農業国タイの80%の share となる。前記、味の素社同様、メナム河に沿った荷揚設備と原料倉庫に相当資本をかけている。将来はアンモニアなどの国産化が進めば5万トンとさらに現在建築中の10万トンの原料倉庫は、この国産化の発展により必要性は少なくなることでしょう。

設備機械の主なもの全部は日本製ですが、工場内にはポリエチレンの織布工場があり、縫製、印刷まで施工している。この方にも100人くらいの従業員がいて、肥料部門にも200人と合計300人、うち日本人は9人でした。工場を案内、説明して下さった増田取締役工場長と水野建設本部主任は宇部のセントラル硝子から出向して居られるとのことでした。

翌19日、12時40分、バンコックを出発する予定であるが、その前の時間を利用して、バンコックにあるシャムセメントグループの本社に立寄って、同社の概要を映画によって説明していただく。

シャムセメント社は1913年、当時のラマ六世が国策会社(王室の意味らしくも?)として設立したものであるが、現在はパブリックカンパニーである。いただいたデラックスな会社案内の表紙には金色燦然と王室のご紋(日本の菊のご紋に相当する由)が輝いていて、また扉には両陛下の写真が掲載されてある。また訪問した CM MC (コンストラクション・マテリアル・マーケティング・カンパニー)のエレガントなビルの映画を写してくれた2階の会見室の壁にも両陛下の大きな真影がかかげあって、由緒ある会社のイメージが一パイであった。質問にお答え下さったイサラセナ専務も気品のあるゼントルマンでした。タイ国内の4ヶ所に工場があり、ロータリーキルンは合計20本あって、年間300万トン生産し、国内の大半のシェアをもっている。従業員も5,000人で、映画に出たキルンは旧式のシェルの円周に円筒のクーラーのついたものでしたが、新鋭工場には、S.P.キルンでコンピューターライズされたものもあり、すべて、デンマークのFLスミス製であるとのことでした。なお国内には他に二つのセメント会社があるし、石灰石も国内に産出する。なお傘下に、コンクリートポール社、シャムファイバーセメント社、シャム製鉄製鋼社が

あって、スレート、タイル、ボードにパイプと、セメント製品とプラスチック製品を造っている。またコンクリートポールはなぜか日本のように円形の柱ではなく、四角いもので大小あり、小さいものは12cm くらいの角柱で、村の貧しい家並にこの角電柱に裸電球がついていて、淡い光をなげかけ、そこから何かエレジーが聞えて来るような風景が特に印象的であった。コンクリートパイルも工形で、長い樋型の枠に生コンを流し込んで、5~6人で突いたりならしたりして造っていました。造型機を高速回転して、遠心造形法による日本のそれとは、各段の差があることはもち論ですが、低賃金、完全雇用を目標にしている国状にもよるもので、一概に評価することはできないと思った。製鉄圧延工場ではパーインコイルの圧延工程がスクリーンに出て来ましたが、7カリパーくらいの圧延ロールから、8字形にループ床上を繰返して圧延される方式のもので、日本でも遂最近まで行なわれていましたが、ランアウト速度が毎秒6メートルくらいで、日本で現在の連続圧延の毎秒16メートルくらいと大分差がある。もっとも製鉄製鋼の方は設立後30年くらいで歴史も浅く、生産量も年間15万トンくらいとか、将来を期待する次第である。約1時間くらいお邪魔してお別れしましたが、何でも大雨で洪水があり、工場が水浸しとなり、本社からも応援に出掛けられて、御多忙中のところだったのをいろいろと御説明いただきまして恐縮でした、心から厚く御礼を申し上げます。

これでタイ国での視察を終了し、全員バスで一路空港へと向いましたが、比較的高賃金、人手不足の日本とは逆に、タイ国をみての結論として、低賃金完全雇用を訴えるこの国では、省力化を考えた機械設備は国状に合わないこと、インドなどとはまた一味違った省力化されない設計のものであればならないこと、しかしそれが一昔前の設計でよいというものでもない、簡単なことのようにこれは『左手で字を書く』程むずかしいことのように思えた。

シンガポールの粉体工業

シンガポール空港に着いた時は夕暮の7時近くで、スコールの後で涼しいということでしたが、日本の真夏の暑さで、明20日は山に登る予定とか、一同気掛りにしていましたが、朝6時半起床、朝食もそこそこにバスに乗り、ジョホール水道を渡り、ゴム林とヤシ林の続く中を約2時間、ジョホールバールから奥地へ。

鉱山へ到着したのは11時、この鉱山は戦時中に石原産業が開発したものだそうですが、鉄鉱石としてはスズの含有量が多く、スズのみではまた採算がとれないとか。

30メートルくらいの山を露天掘りして、ダンプカーで鉱石を選び洗鉱して、1,500φ×3,000 Lのボールミルで粉碎して、最後に1台のウィルフレーターブルから出たものを乾燥し、小さな2台のマグネットセパレーターで鉄とスズとに分別していましたが、当初のダンプ1台分が果して何キロの鉄とスズの粉体になるのか知ることができませんでした。近くに綺麗な滝が流れているので、瀑布鉱務公司 (Water Fall Mining Co.) と称する由、その滝を見物して予定の時間をオーバーしたので、急いでまたバスに乗って、シンガポールのジュロン工業団地へ。

大日本塗料KKに着いたのは16時で、広く新しいこの工業団地を探し廻って多少余分な時間を費す。何とか駈込んで工場を案内していただくことができたが、一行は暑さと強行軍で多少バテ気味だったが、川島工場長が食堂に案内して清涼飲料水を下さったので、一息入れて工場を拝見した。この3月頃完成して操業間もない新しい工場は未だ本格的に移動に入っていない。日本から輸入したペンを適当に色合せして出荷している程度といったは失礼かも知れませんが、三本ロールとミキサーと集じん用バッグフィルターが特に目立った設備で、しかも全部日本製であったこと、送電から二次側の配線まですべて地下ケーブルで、ヤボな電柱など見られなかったことを含めて、建物とも新しいイメージの工場のユートピアといったところでした。この辺一帯がジャングルだった昔日の面影が今はなく、一望によく整地造成されて、新しい工場群が建設されつつあり、発展途上の国土開発の熱い息吹が迫ってくる思いがした。

翌21日は再びこのジュロン地区のアジャセメントKKを訪問した。台湾系の会社で、セメントクリンカーを台湾、フィリピンまたは日本から輸入し、ボールミルで粉碎し、エヤーセパレーターで分級して、パッカーで袋詰して出荷している。シンガポールには石灰石が産出しないし、600キロ離れたマレーシアまで行かなければ入手できないし、しかも陸送になるという事情もある。ボールミルは3mφ×30mLが2台(台湾製と神戸製鋼製)、4.8mφのスタートバント型セパレーターが2台に、5,000トンサイロ2基、パッカーの他にばらづみ設備と、クリンカーの倉庫が広い敷地にゆったりと配備され、従業員は50名くらいで年間50万トンのセメントを出荷し、国内の需要の余分量は近隣国へ輸出もしている。お忙しいところを陳副工場長と、日本の九大を昭和48年卒業された羅発初技師が日本語で詳細に説明して下さい。厚く感謝の意を表して、一同でサイロの前で記念撮影をしてお別れした。

午後シンガポールセメントKKに向いました、シンガポール港の税関を通った岸壁にあって、近くで先般日本赤軍のシージャックがあったとかで、税関で手間どり、バスの中で約2時間お昼寝といったハプニングがありました。しかし小野田セメントの小川技師と橋本氏が笑顔で迎えて下さったので一同ホットして、和やかになり、工場を案内していただき、一巡後差出してくれたジュースに喉を潤した。

1961年に小野田セメント、三井物産と現地のホンレオン社との合弁会社として発足、クリンカーは日本の小野田セメント社より輸入しているが、機械設備はほとんど前記アジャセメントと同一で、したがってセメントの生産量も同一のようでした。しかしパッカーが4チューブのもの(日本自動製)が4台並び、他にばらづみ設備とともに出荷に活気があり、荷積の車の出入りも多忙をきわめ、5,000トンサイロ2基増設中で、好況の兆が伺われました。お繁忙中お世話下さいまして本当に有難うございました。

以上で一応全視察予定を無事終了しましたが、今少し紙面をかりてシンガポールについて見物したことを蛇足的に述べることにします。1965年8月に独立して未だ10年、東京くらいの広さ(584 km²)に人口224万人、中国系170万、マラヤ系34万、インド系15万、その他で、純然たるシンガポール人というものは無い。ジャングルの美しい緑の中に、欧米風の華麗な高層ビルが聳え、その大半は他国資本によるものが多い中に、高層アパートのみが国策による労働者の公営住宅であると聞く。香港と並んで東南アジア各国と、先進諸国との経済の中継地として、経済も政情もまた安定している上に、工業の発展に特に力を入れている。設備機械の輸入にも税制面で特に優遇するなど、日本の進出企業もジュロン工業地区だけでも200社を数えるとか。デパートでは伊勢丹と八百半がともに順調な業績を上げている。話は前に戻るようだが、先年タイ国のククリット首相が中国を訪問した際、毛沢東主席が、『共産主義に打ち勝つには、それ以上の生活を民衆に与えるしかない』と語ったそうですが、シンガポールこそこれを地で行く政策をとり、労働者特に技能者には高賃金とそして住居を与えている。これがこの国の防共政策であるといふ。未だ発展途上にあるシンガポールの市内はタバコの吸がら一つない(捨てるに罰金6万円也)マナーの国としても有名だが、不思議と軍隊はあるそうですが、兵隊を一人も見掛けなかった。最後に現地の人に頼まれたことを一つ。それは日本で人造ゴムの開発が進み、それに加えて古タイヤの投棄規制によって再生ゴムの利用が多くなり、その上日本国内の不況もということもあってか、最大の生ゴムの輸出国日本への輸出が近年激減した。中継港シンガポールはもち論、東南アジア諸国のゴム園は疲弊の一途を迎えるのみです。帰国したら日本の関係者に宜敷しく伝えて下さいとのことでした。

22日22時22分無事羽田に着陸しました。井伊谷先生始め、命尾社長、広信社並に内外航空社、お世話様でした。

なおこのレポートをまとめるに当り、一行の漆崎日出明氏、増田昭雄氏、宮恒雄氏のご協力に感謝します。